

山宮浅間神社の成立

山宮浅間神社は、現在、独立した神社になっているが、昭和10年代までは浅間大社（本宮）の摂社で、本宮（里宮）に対する山宮であり、神主は山宮太夫と称した。現在宮司は、本宮の宮司が兼務することになっている。

「富士本宮浅間社記」によれば、山宮浅間神社が現在の地に設けられたのは、日本神話の時代であったとするが、正確な創建年代は不詳である。同社記では、垂仁天皇の時に山足の地へ大神を祀り、景行天皇の時に日本武尊が山宮の地に大神を祀ったとされる。

発掘調査では神事に使用されたと推定される12～13世紀の土器片が多く出土している。また文献上では、今川義元が1551年（天文20）に発給した朱印状に、山宮浅間神社に関わる神職の役職名が記述されている。

富士山遥拝所

山宮浅間神社には、拝殿や本殿が存在せず、それらが位置すべき場所には石列でいくつかに区分された遥拝所が設置されるのみという特異な形態が見られる。このような形態は、富士山自体を神と考え、山体を遥拝する古代からの富士山祭祀の形を留めていると推定されている。

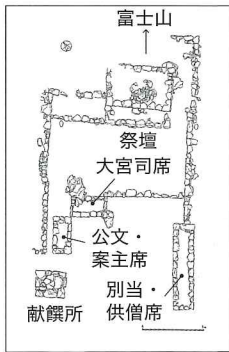
遥拝所は、長方形の玉垣で囲まれ、南北15.2m、東西7.6mの大きさを示す。その中は、30～40cm程度の溶岩を用いた石列によって区分されている。

富士山を拝む方向に祭壇が位置し、祭壇に向かって左側に祭儀を行う際の大宮司席、公文・案主席、献饌所が、向かって右側に別当・供僧席が設けられている。

遥拝所の周辺には約45m四方に区画する石塁が見られる。



遥拝所内



遥拝所の石列と役職の配置



【アクセス】

〒418-0111 富士宮市山宮740



JR身延線富士宮駅から車で約15分

発行：富士宮市富士山世界遺産課
 問合せ：平日 0544-22-1111（市役所代表番号）
 休日 0544-58-5190（案内所）

世界遺産 富士山

構成資産

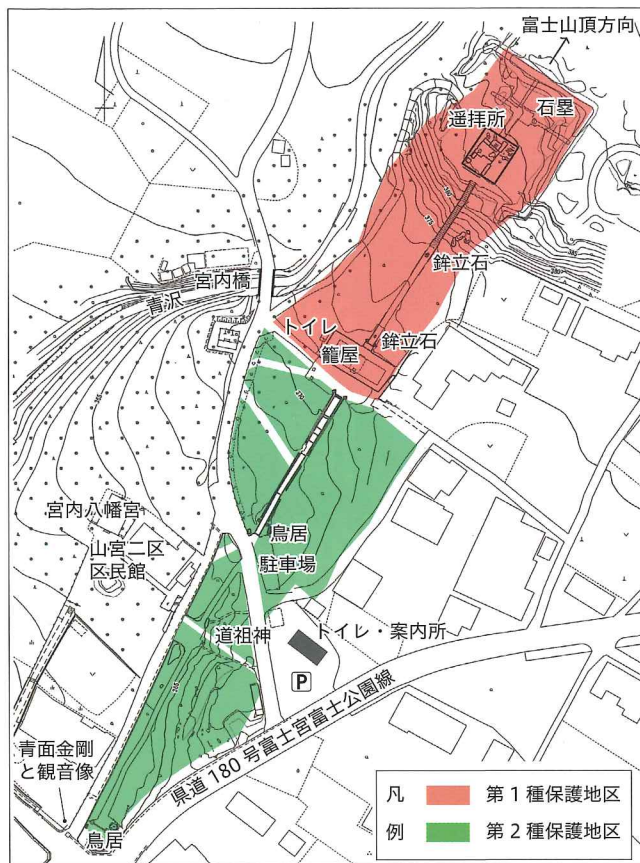


山宮浅間神社

山宮浅間神社

山宮浅間神社は、富士山本宮浅間大社（以下浅間大社と略す）の祭神である富士神が最初に祀られた場所と言われ、浅間神として現在の浅間大社に遷されることで「山宮」となった。全国の浅間神社の中でも最も古い神社とされる。境内には社殿がなく、富士山を直接遥拝するための遥拝所があり、古代からの富士山祭祀の形が今も息づいている。

- 祭神： 浅間大神
アサマノオオカミ
フジノカミ
コノハナササキヤヒメノミコト
 木花之佐久夜毘売命
- 立地環境： 溶岩流末端部の高台とその周辺



山宮御神幸

かつて、浅間大社の春秋の大祭前日に、浅間大社の祭神が山宮を訪れる「山宮御神幸」が行われていた。祭神が旧地へ里帰りするという意味や、春に農神として山から里に下り、秋に山の神として里から山に帰るといふ意味があると言われている。

『浅間神社の歴史』によると、未の刻（午後2時）に本宮で神事が始まり、神の憑る銚を木の行事という役職の人が左肩に載せ、途中肩を替えることなく山宮へ向かった。山宮まで何回か休むので、銚は御休石の上に敷柴（榊）をして、その上に安置した。今、浅間大社楼門前と山宮浅間神社参道に残る銚立石が御休石である。山宮に着くと神事が行われ、その夜丑の刻（午前2時）に還幸となった。「深更なれど燈火を用いず」とあるので、暗い夜道を還ったのであった。御神幸は一般的に「夜無言無燭」とか、昼の場合は「沿道の家々戸を閉ざす」という齋忌の厳しさが通例であるように、山宮御神幸も夜の還幸であった。

山宮御神幸は、明治6年（1873）まで4月と11月の初申の例大祭の前日、未の日に行われていたが、以後は行われていない。

「山宮御神幸」に使用された行路を「御神幸道」と呼び、祭神が通る道筋50町（1町＝約109メートル）の間には、元禄年間（1688～1704）に、1町目毎に目安の石碑（「丁目石」）が建てられた。湧玉池の神幸橋（湧玉橋）上流右岸には道筋最初の石碑（首標）がある。丁目石の大部分は失われており、残っ



湧玉池畔の首標

ている物の中にも場所が動いている物があるため、ルートは判然としていない。



四十六丁目の標石



四十九丁目の標石

銚立石

祭神は銚に宿り山宮へ向かったため、御神幸の途中休憩する際に銚を置く「銚立石」があった。銚立石は道筋に幾つかあったといわれるが、現在は浅間大社楼門前に一つ、山宮浅間神社参道に二つ残るだけである。



浅間大社楼門前の銚立石



山宮浅間神社参道の銚立石

山宮浅間神社の本殿

「富士宮の昔話と伝説」より

山宮浅間神社には、本殿があるはずの所に、石が並べてあるだけで建物がありません。

いつのころか、「神社に神様が祀る建物が無いのはおかしい。」と思う人がふえてきました。そして、村の人々は、神社に本殿を建てようと思うようになりました。

ある年のこと、村の人々が寄り集まり、本殿を造る相談をしました。相談がまとまると、村中で富士山から木を伐り出して本殿造りに取りかかりました。村人の苦心の結果、やっと棟上げ式ができ、みんなで喜び合いました。

すると、その晩のこと、大風が起こって、せっかく棟上げ式ですませた本殿が吹き倒されてしまいました。村人は大変落胆しましたが、本殿造りをあきらめるのも口惜しく、再び富士山の木を伐り本殿造り

を始めました。

ところが、棟上げ式をすませた晩に、ものすごい大風が吹いて、村人が苦勞して造った本殿が、また吹き倒されてしまいました。そればかりか、今度は村人の家々も大風の被害を受けました。でも、村人は大風の被害にも負けず、その後何度も本殿を造ろうとしました。しかし、その度に本殿は大風に吹き倒されてしまい、村人の家々も畑の作物も大きな被害を受けるようになりました。

そんなことが続いたので、村人は、「これは、きっと神の祟りだ。」と思うようになりました。それ以後、「山宮浅間神社に本殿を造ろうとすると風の神の祟りがあるので、本殿を造ってはいけません。」といわれるようになりました。

それで、山宮浅間神社には今でも本殿がありません。